

国際サーカス村通信	VOL13NO9	2009年6月22日(月)
		文責 西田 敬一
編集 NPO 法人国際サーカス村協会	〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1	
Tel : 0277-70-5010 Fax : 0277-97-3688 mura@circus-mura.net http://www.circus-mura.net		

第5回東京国際フール祭、無事終える

サーカス学校で行なったワークショップの期間をいれると、約2週間にわたった東京国際フール祭は6月14日に終了、いまは、ほっとひと息ついている。

最終日に参加させてもらったサーカス学校の卒業生、生徒たちもそれぞれ懸命に演技し、観客から暖かい拍手をもらうことができたのは、嬉しいというか、フール祭全体の作品の流れから見ても、サーカス学校の演技だけが極端にレベル落ちしていることもなかったのも、それが僕にとっては、安堵感のようなものになっているようだ。

もちろん、ひとつひとつの作品については、まだ不出来な部分もあるし、劇場に出演し、人前で演技する以上、それなりの覚悟、準備が必要で、そのあたりのことを自覚できていない者もいるので、こうしたことはしっかり本人が周囲を見て学んでいかなければならない。今回のフェスティバルを支えていたのはいうまでもなくプロのスタッフである。そういう人々に対する挨拶や態度といったものをないがしろにしていいはずはない。終演後の打上げで、そのあたりのことを指摘したスタッフがいたことを生徒たちには伝えたい。自分だけよければいい、自分に関係ないことは聞かないというのでは、今回のようなショーには参加できなくなるリスクを自分で背負うようなものである。そのような人に舞台を用意してくれる、お人よしはいないだろう。

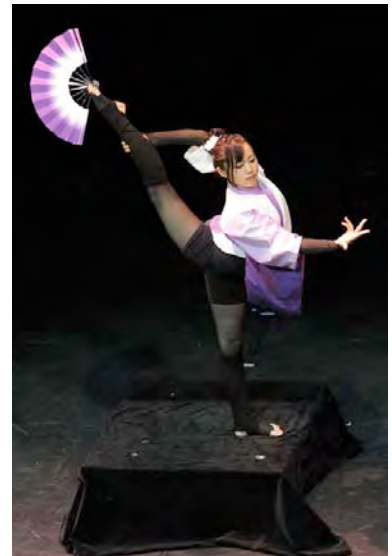
ショーの内容については、技術はかなり身につけているが、表現としての作品作りをしてほしいという意見があることも、ここに書いておきたい。もちろん、高度な技で自分のショーを作るという方法がないわけではないし、選択は各自が行なうべきであろう。

*

BP ZOOM のワークショップは、午前中はサーカス学校の希望者全員とプロの6人、そしてカンボジアから来たボレンとサムナン。午後は、サーカス学校の生徒は4人に絞って行なった。通訳などのスタッフをいれると、総勢15名。僕は例によって炊事班で、食事の準備に忙殺され、午後、ワークショップを覗きに行っただけで、うたた寝をこいでいた。

それにしても、BP ZOOM のワークショップは質が高く、すでにプロとして活躍している参加者も大いに勉強になったようで、ワークショップを終えた後、東京での公演中も彼らに会うために日参していたようだ。

彼らのショー『A WONDERFUL WORLD』は、サーカスの世界を彼らのクラウン的な感性で表現しようとしたもので、一見シンプルながらも、そこにはさまざまな計算が働いていて、いつのまにか彼



らの世界に引きずり込まれてしまう。それでいて、どこかに破綻がおこれれば、すべてが台無しになってしまうような危うさがあり、そこから来る緊張感のようなものが、僕にはたまらない魅力だった。

さて、各演目について、簡単に感想を書いておこう。

ざん『ひとり文楽』 『山の音楽家』

オリジナルな語りの世界とでも言えればいいのか、それこそ立て板に水ではないが、モーレツなしゃべりに観客は圧倒されていた。シアターXのような劇場では初めてというが、その臆するところのない立ち振る舞い（といっても、落語家のように座ったままだが）がなんとも魅了的だ。語りの魅力に取りつかれて、でも、既存の枠に収まりたくないという反抗精神が覗く。どこまでラジカルに、わが道をいくかを今後も注目していきたい。

チカパン『今夜のおかず』

パントマイミストがお客を巻き込むのは、いささか邪道のような気がするが、それを逆手にとったような作品で臨んだチカパン。その試みは、お客のノリがいいこともあって成功したといえるだろう。エチュードの羅列というパントマイム公演では、往々にして技術の披露になってしまうのだが、今回の試みが、そうした弊害をのりこえていくきっかけになればいいなと思う。

kaja 『リンク』

マジックネタや音楽を巧みに使うという方法で、不条理の世界に迷い込んだようなkajaらしい作品。いつ見ても上手いなと思う一方、いつものkajaではなく、別のキャラクターで演じるとどうなるのかと感ずる。そのキャラクターは一人でなくてもよく、2つ、3つのキャラクターを組みあわせるとか、だれかと組んでも面白いかもしれない。

チーズ『トカラ』

恋が破れ、夢の世界に迷い込み、そこで大きなリングを操る、そのリングの動きで構成された作品。舞台上でリングを生き物のように見せられるかどうかが勝負だった。それはかなり成功していたが、他方、リングを手放している時、もっと緻密な演技がほしかった。こうした作品は、照明でリングがきれいに見えるかどうかポイントになるので、公演するチャンスが少ないだろうことが残念。

ななな『笑顔のままで』

やってくれました。10分間、ほぼ笑っぱなしという作品。どうやらなななは、現代社会の女性の神経症的世界を描くのがいいのではないかと感ずる。本人に責任がなく、社会のなにかが生命体である女性に作用して、そこになにかグロテスクなものが覗いてくる。そんな世界を一時間にわたって演技したらどうなるのだろうか。

to R mansion 『tetetete ten minutes』 『GAME』

『GAME』は、オムニバスBで演じられたものだが、まとめて感想を書く。『tetetete ten minutes』は、大道芸でも演じているもので、昨年「へブン・アーティスト」の審査会で始めた見て、その時、日本にもこういうグループが出てきたのかと面白かったので、フル参加を依頼した。シアターXに来ているお客で、大道芸関係者以外は、このようなシ



ョーを見たのは初めてではないかと思う。いわば、コミック・アクションの世界で、それは『GAME』も同じ。かれらのオリジナル部分というか、そのスピーディな動きは確かに面白いが、それだけに注文というか、彼らが発展したかたちの作品を見たいと思ってしまう。実は、個人的には、オムニバスBで、その発展形を見たかったのだが、その夢は叶わなかった。彼らのアクションがこれ以上大きく伸びるとは思わないだけに、作品のテーマやその表現にどのような手法を学び、取り入れるかが、彼らがステージで作品を発表していく以上は欠かせないと思う。基本的には、大道芸ではなく、ステージで作品を発表しようとしているにちがいないグループであり、しかもメンバーの結束も固いようなので、将来に期待したい。



PPS 『Good Morning! I love you!』

ぼくらのサーカス学校と交流のあるカンボジアのPPSから、彼ら呼んだのは、海外から優れたクラウン作品を招くというフル最の基本線からはいささか外れているかもしれないが、それでもなおかつ彼らに参加を求めたのは、彼ら自身にさまざまなクラウン、パントマイムの世界を知ってもらいたいのがひとつ。それと、彼らからは、生命力というかエネルギーという、テクニックではないが、どこか僕らが忘れていた、失っているものを感じ取ってもらいたいと考えたからだ。今後、彼らがどのような作品作りをするか、長い目で見ていきたいと思う。

Le Carre Curieux 『derniers instants...』

ディアボロとボールを演じるジャグラーの二人の作品と言ってしまうと、それまでだが、普段、ぼくらが目にするジャグリングの世界とはまるで違う。彼らの作品は、彼らが身につけた技術で、ひとつの世界を描くというものである。日本でも、そろそろ技術を披露するレベルから、それらの技術を使った別の世界を描くアートの世界を目指してもらいたいと思う。そうしたことをイメージしてもらいたいために、彼らに来てもらったのだが、さて、彼らの演技を見たジャグラーたちはなにを感じたであろうか。

ところで、フル祭全体についてだが、一番感じるのは、もう少し時間的余裕が欲しいということ。これは、予算面からいっても不可能に近いのだが、どこかで時間を作って、お互い意見交換するようなことができたと思う。日本人のアーティストにとって新作の発表の場に終始しても仕方がないし、海外の優れた作品の紹介の場の提供というのも、それはそれなりに意味があるとしても、やはり、どこか物足りないというか、この機会をもっと有効に利用する方法があるのではないか。

第1回目のフル祭は、クラウン・コンGRESという、試みを行なったが、これは期尚早というか、この議論に参加してもらいたかった、クラウン、パントマイムのパフォーマーがほとんど集まらなかった。

今回、一旦は、多忙を理由にあきらめたワークショップを、BP ZOOM側の希望というか、やるべきだという主張に、苦労覚悟で実施し、参加者が喜び、その顔が輝くを見て、やってよかったという結果になったが、こうしたことも、今後のフル祭に生かせればと思う。

●4 月例会報告『コルテオに参加して』

09年2月4日より東京公演から始まったシルク・ドゥ・ソレイユの『Corteo (コルテオ)』。6名のアーティスト達に月例会で、自身の事、シルク・ドゥ・ソレイユについて語っていただきました。

西田：では自己紹介からお願いします。

Valentyna Paylevanyan (以下ヴァレンティナ)：私はコルテオでキャラクター、アクロバット、風船ダンスを演じています。27年間サーカスで働いています。ウクライナ人です。そしてこちらにいるのは Grigor Pahlevanyan (以下グレゴリー) です。2人ともロシアですと働いてきました。彼はアルメニア人です。ソヴィエトサーカス公団のあとはロスカンパニーで働いてました。1982年から2人一緒に働いています。(注：小人の夫婦)

Dimitry Turkeev (以下ディミトリ)：私はウクライナ人で、空中ストラップのアーティストです。2005年にACCと一緒に仕事をしました。(注：今回の会合は彼に頼んで皆を集めてもらいました。)

Irina Teslenko (以下イリーナ)：私もウクライナ人です。コルテオではパラダイス(コリアンクレイドル)、鉄棒などに出演しています。もともとスポーツをやっていて、サーカスで働き始めたのは最近です。

Petar Stoyanov (以下ピョートル)：私はブルガリア人です。トランポリンとシーソーをやっています。コルテオは最初の頃から参加していて、トレーナー的なこともやっています。

Eduard Novac (以下エディック)：私はモルドバ人のジャグラーです。キエフのサーカス学校で勉強しました。沢入国際サーカス学校にいた高村篤君と同級生です。3年前からコルテオで働いています。

西田：では日本人側も自己紹介しましょう。ではハンガーマンから。

犬飼：こんにちは。20年くらい大道芸をしています。

西田：彼はストリートパフォーマーとしてフランスやヨーロッパのフェスティバルに何度も参加しています。

ディミトリ：シルク・ドゥ・ソレイユ(以下ドゥ・ソレイユ)のボス、ギー・ラリバテも大道芸人でしたよね。髪型もボスに似ています(一同笑)。

大野：今日は来てくれてありがとうございます。私はACCで働いています。コルテオはこの間観ました。楽しかったです。今日はお話を聞くのを楽しみにしています。

長屋：ACCの新入社員です。モンゴルのサーカス学校でコントーションの勉強をしました。

大須賀：こんにちは。私もACCで働いています。今日はお会い出来るのを楽しみにしていました。

安部：こんにちは。私は電力会社に勤めています。サーカスが大好きで良く見に行きます。海外に出張する時は必ずその国のサーカスを見に行きます。日本でもたくさん見えています。コルテオも観ましたし、ドゥ・ソレイユは全部見えています。『サルティンバンコ』は7回観ました。

ピョートル：コルテオは一回だけですか？(一同笑)

ディミトリ：サルティンバンコは内容がかわってきているから、また観なくちゃいけないですね。いまは舞台サーカスのような感じでアメリカで公演しています。

Kent：20年東京に住んでいるデンマーク出身のジャーナリストです。サーカスとストリートパフォーマンスが好きです。インドへ行ったりサーカスを観にペルーまで行きました。

船橋：コルテオを見る機会が今まで無かったのですが、今日はお会いできて嬉しく思っています。

上島由紀：今日は楽しみにしてきました。よろしくお願いします。

船橋：彼女は日本の古典芸能のパフォーマンスもするんですよね。

上島敏昭：日本の伝統的な大道芸をやっています。例えば、傘の上でボールを回したり、ジャグリングのようなことをやったり、獅子舞などもやります。

西田：小さい会社の小さい社長です。ギー・ラリバテとギー・カロンとは古いつきあいです。日本でドウ・ソレイユが最初に興行を始める前に、2人と中国で会いました。これからフジテレビに会いに行くのだけど、どういう会社？と聞かれました。最初日本で売り込むのが大変だったみたいですが、今は見事に逆転しています。今日は楽しくお話ししましょう。

辻：こんにちは。僕も ACC で働いています。ディミトリとは4年前に北海道と姫路で一緒に仕事をしました。今日は皆さん来てくれてありがとうございます。

マハバット：今日通訳をしますマハバットです。キルギス人です。日本に留学しています。

西田：コルテオはいつ始まったのですか？

ディミトリ：4年前です。ちょうど二日前の4月21日、4周年を迎えました。

エディック：101人のアーティストが交代しながら続いています。

ヴァレンティナ：4年間で1480回のショーをやりましたが、その間ずっと出演しているのが、私達（ヴァレンティナとグレゴリー）小さい2人だけです。（一同驚く）

西田：どのくらい練習して作りましたか？

エディック：構想を含めると5〜6年。アーティストと一緒につくるのは7ヶ月です。カナダで初演して、その後アメリカで公演しました。そして日本に来ました。

ヴァレンティナ：大陸での移動は、気候にあわせて移動しました。寒いときは暖かい所、暑いときは涼しいところ、といった具合です。

西田：アメリカではコルテオのテントは一つ？

ディミトリ：テントは一つです。移動はトラックが60台連なって動きます。まるで電車のような感じです。2週間かけてテントを設営しました。今のコルテオのショーはとても大きいので、これ以上はさすがに物量を増やしたくないようです。

大野：コルテオはこれまでのドウ・ソレイユとイメージが違うような気がします。これまでは個人をあまり見せることはなく、全体を見せることに重点を置いていた、誰が演じていても成り立つショーに見えましたが、コルテオは個人芸が生きています。とてもサーカス的に感じました。

グレゴリー：そうですねその通りだと思います。

エディック：このショーはドウ・ソレイユでは初めて人間が前に出てくることを前提に作られたショーです。技術や装置などの技術的なことよりも、人間を重視した作品だと思います。

大野：ドウ・ソレイユに入る前にドウ・ソレイユに対するイメージ、入ってからのイメージで変わったところがありましたか？そもそもなぜ、コルテオに出演しようと思ったのでしょうか？

エディック：どうして、コルテオに出演しているかという・・・他に仕事がなかったのです（笑）。ドウ・ソレイユのイメージですが、入る前は凄く大きいサーカスと聞いていましたが、あまり具体的なイメージはありませんでした。入ってそれを実感しました。

ピョートル：私はドウ・ソレイユどころかサーカスに対するイメージすらありませんでした。スポーツ出身でトランポリンをやっていました。入ってから、動物もいないし、こういうサーカスもあることを知りました。

ディミトリ：彼はコルテオに出演する前にカナダで、世界中で公演しているドウ・ソレイユのアーティスト達に何かあった場合、いつでもそこに参加出来るような、ドウ・ソレイユの待機場のような所にいました。そこには100人くらいアーティストがいます。そこで5ヶ月くらい練習していました。待機中にコルテオから声がかかりました。

大野：モントリオールで待機中は、お給料はでるのでしょうか？

ピョートル：もちろんです。そこでは毎日のスケジュールが決まっています、何時から何時まで何のトレーニングをやるか、どの先生と何をやるかなど決まっています。その場所にはオーディションを受けてからそこに入ります。

辻：どこの公演に行くか、わからない状態で待機するのですか？例えば日本で公演中のコルテオに行くかもしれないし、ヨーロッパで公演中のサルティンバンコに行くかもしれない、という状態ですか？

ディミトリ：そういうときもありますが、だいたいオーディションの時に、何にどんな人が必要かという事を念頭において、人を取っています。でもどこに行くかの保証はありません。その辺は臨機応変に対応します。

イリーナ：私の場合は特別かもしれませんが。私は待機状態というのはありませんでした。私は体操をしていました。その演技ビデオをドウ・ソレイユが見て、すぐに出演先が決まりました。コルテオではコリアンクレイドルの演技をしています、前にやっていた飛び手がやめてしまったので、すぐに決まりました。かなり急いでビザなど取得しました。

ディミトリ：彼女の演目は、演技者の具体的な体重体型も決められていたので、そこにフィットしました。珍しい状況かもしれません。

西田：体操は何をしていましたか？

イリーナ：ウクライナの体操チーム、4種目です。

西田：オリンピックは目指していたの？

イリーナ：アテネ五輪の準備をしていたのですが、怪我をしてしまった。アテネはテレビで観てました。

西田：4種目で何が一番好き？

イリーナ：段違い平行棒です。

ディミトリ：私の場合は、ドウ・ソレイユのプログラムは、ドウ・ソレイユの中ですべて作られると思っていましたので、私は自分のそれまでの作品がきちんと出来るかどうか、入る時のポイントでした。私達の作品はほぼそのまま、コルテオで公演できています。それまでドウ・ソレイユは好きでしたが、自分がそこに入るとは思いませんでした。なぜかというとうドウ・ソレイユの中で作品を作り直すと思っていたから、私には縁がないと思っていました。

大野：自分の作品をいじられるのが嫌だったということですか？

ディミトリ：ドウ・ソレイユから電話が来たときに、私はスポーツの人間ではないし、私達は私達の作品を持っていますが、それでもよいですか？と聞いたら、彼等は衣装と音楽は替えますが、その他はそのまま良いと言いました。彼等から電話が来たときにビデオを送ろうとしたら、もう彼等は私達の作品のことは知っていました。彼等は4年間、私達のことを調べていました。かなり追いかけていたと言えます。私はヴァリエテで働くのが好きで、コルテオにはヴァリエテの要素があるから、そういうところも好きです。

グレゴリー：コルテオの作品では、演出家はそれぞれの演目のキャラクターを最初から決めていて、小人2人を出演させることを考えていました。ちょうど私達がイスラエルで仕事をしていたときに、ドウ・ソレイユの演出家が私達のもとに来ました。2003年の話です。イスラエルでの仕事は小人達だけでやっているショーでした。その前はロシアのロスカンパニーで働いていました。今はフリーランスです。私達2人（ヴァレンティナと）は3つの番組を持っています。さらに2人のパートナーと4名で行うアクロバット、リングを使った演技、あと沢山の猫を使った芸です。帰ろうと思えば、ロスカンパニーには帰れます。

Kent：古いサーカスと今のサーカスとどう思いますか？どちらが好きですか？

グレゴリー：違いは大きいですが、昔のサーカスは動物がいて、リングにおがくずがひいてあって、動物がいて、においがありました。今のサーカスは、ショービジネスですね。

西田：伝統的なサーカスはショービジネスではないということ？

グレゴリー：そうですね。伝統的なサーカスはサーカスそのものが生活スタイルであり、朝から晩までサーカス場で全部自分達で仕事をしなくてはならなかった。衣装を縫うのも、動物の世話をすることも、道具を作るのも、みんな自分達でやらなくてはなりません。今のサーカスは、細かいことは全部誰かが代わりにやってくれます。私達はただサーカス場に来て、ショーに出演だけして帰ります。

生活しているということが、昔のサーカスにはあった。一つの演目を作るのに全部自分たちがやっていた。足りない物があれば全部自分たちで揃えたり、取り替えたりしていた。今のサーカスには、私にはそれをする権利すらありません。昔はショーの内容を変えようと思えば、自分で変えられた。自分が見たいショーをやっていた。今では自分で変える事ができません。今回の場合は全部決められたことしか出来ない。契約がそれを許さないのです。

ケント：どうして、今のサーカスで働いているの？

グレゴリー：今は休暇中です（一同笑）。昔は全部やっていましたが、今はあまり仕事をしていませんからね。私の回りに何か問題が発生しても、誰かが解決してくれます。しかし、昔のサーカスにそれほど戻りたいとも思いません。もう年金生活して、引退したいです（笑）。

ケント：他の人は、伝統的なサーカスで働きたい？

エディック：どうでしょう？良い方法で、自分を見せられるところがあればそこに行きます。

ヴァレンティナ：もちろん、ソ連時代とペレストロイカ以降のサーカスを巡る環境は変わりました。サーカスをとりまく環境は悪くなっています。

グレゴリー：気持ちが揺れ動く所ですが、昔のサーカスは長い間契約は出来ませんし、仕事を常に探して行かなくてははいけません。それはそれで大変です。

西田：コルテオが終わったらどうしますか？

グレゴリー：先のことはあまり考えません。とりあえず休むでしょう。でも猫と一緒にやれるサーカスができるならそこに戻りたいですね。

犬飼：バルーンの演目はすごく良いのですが、前からやっていたか？

ヴァレンティナ：バルーンの演目はコルテオの演出家によるものです。リングの演技はコルテオの前からやっていました。

安部：何かを体で表現するときにサーカスは非常に制限が多くあると思いますが、今回の葬式のテーマを与えられた時に、どのように演技を創作していったのでしょうか？もし、テーマが誕生だったら、何かトリックを変えたりしますか？

グレゴリー：私の場合、それは演出家の仕事だと思います。私は演出家の言葉に従っています。

エドワード：アーティストは道具だとも言えます。

安部：ディミトリはどうですか？

ディミトリ：たとえばコルテオの場合、葬式という演出の中で、1人のクラウンが死ぬときに自分の人生を思い出す、という作品です。彼が思い出す、彼が思い描くサーカスをアーティストが演じています。例えば、彼がなりたかったサーカスアーティストを演じています。結果的に演出家が考えるものにあわせることになりませんが、だからといってマリオンネットではありません。サーカスはアーティストがやっているし、人がやっているものです。

西田：演目、パーツの演出、全体の演出を違う人がやっている。悲しいことをジャグリングで表現する場合は、パーツの演出家がいるわけです。

ディミトリ：コルテオには古い芸が沢山出てきます。18世紀のイメージで創っています。はしごの演技もそうですし、古く渋い作品を集めています。はしごの演技も、彼はあの演技を昔からやり続けています。

西田：ドゥ・ソレイユのこれまでの演出だと、一気に登っていくと思うのだけど、彼は出来るか出来ないかをわざわざ見せているところがあるよね。

ディミトリ：彼はアゼルバイジャン出身です。本当に長年あの芸だけをやっています。

西田：あれこそサーカスアーティストだよな。

グレゴリー：昔のソ連のサーカスのシステムは学校の後のサーカススタジオで練習をしたり、サーカス学校で番組を作って、公演をしたり、すごく長い時間をかけて作品を準備して創りました。あの人はそうやって作品を作って来た人ですね。

ディミトリ：彼は33歳です。とても良い「役者」だと思います。

西田：イリーナは段違い平行棒をアレンジしたような新しい作品を作る気はないの？

イリーナ：スポーツの世界から来たばかりで、いまは精一杯ですが、でも新しいことをするのも魅力的です。

西田：日本のイメージはどうですか？

ディミトリ：タバコを買うのが大変です。

ヴァレンティナ：素晴らしいです。凄く好きです。

船橋：食べ物はいかがですか？

ディミトリ：アメリカから日本に来るときに、一番皆が心配したのは食べ物でした。やはりステレオタイプに捕らえている人が多くて、アーティストの中には日本では魚しかないと思っている人が多くて。しかし、来てみるといろいろな食べ物があるので、皆喜んでいきます。テントに併設している食堂ではいろいろな国の食べ物を食べられます。たとえばある国のお祝い事があったら、その国の料理をつくってくれたりもします。とても満足しています。

西田：反対にドゥ・ソレイユに対して不満はありますか？

ディミトリ：不満を話す機会があります。毎週1回45分間、アーティスト達が集まって不満を言い合う会合があります。一番大切なことは仕事をきちんとこなしてゆくことですから、そのためにも意見を言い合います。

大島：ちゃんとガス抜きのある場があるんですね。別に酒を飲ませなくても、ミーティングをすれば良いわけですね。

犬飼：ちなみにどんな不満がありましたか？

ディミトリ：たとえばアーティスト達が、ショーが終了した後にハイタッチをするのですが、しないように言われたことがありました。でも私達はハイタッチが好きだったので、それは残念でした。

エドワード：個人的な話ですが私達はショーが始まる前に、客席にでているシーンがありまして、私は2〜3分カーテンに隠れて待ってはいなくてはならなかったのですが、その間じっとしているのが面白なくて、ある時カーテン越しに客席にちょっかいを出したことがあります。後で、演出家に怒られました。(一同笑)

安部：ヴァレンティナさんが風船に乗って客席に行くとき、お客さんに捕まれたことはありますか？

ヴァレンティナ：ありましたよ。日本で起こったことですが、客の手の上で「押して」と言ったら逆に掴まれて引っ張られてしまいました。靴も脱げてしまいました。アメリカでは50代位の男性にキスをされてしまいました。

グレゴリー：「だめだよ！」って舞台上から言ったのに、やられてしまった。だから僕が客席に降りてその男の奥さんにキスしかえしてやりました(一同笑)。その男性は奥さんに怒られたのか、その後神妙な面持ちで可笑しかったですよ。でもその人はその後何度も観に来てくれて、とてもよいお客さんでした。

出席者：安部保範、犬飼伸次、ウラコワ・マハバット、大島幹雄、大須賀哉子、大野洋子、上島敏昭、

上島由紀、Kent W. Dahl、長屋歩未、西田敬一、船橋雅子
Valentina Paylevanyan、Grigor Pahlevanyan、Dimitry Turkeev、Irina Teslenko、
Petar Stoyanov、Eduard Novac (敬称略 辻卓也 記)

● 次回月例会

議題 フール祭意見交換会

レポーター フール祭参加者

(フール祭をご覧になった方のご意見も伺いたいので、ぜひご出席下さい。)

場所 シアターX・コミュニケーションX和室

日時 2009年7月13日(月) 18:00~21:00

● 第六回ティニ・ティノに参加して

沢入国際サーカス学校 鶴 貞浩

成田空港から韓国を経由し、約10時間かけて、カンボジアの首都プノンペンに到着。空港からホテルに移動するため、フェスティバルのボランティア・スタッフのドロシーがスクーターで案内してくれました。僕たちは、バイクの後ろに六人乗りの客車がついた「トック・トク」というバイクタクシーに乗り、迷走しつつも無事到着。

ホテルで一泊して、次はバタンバンに移動。

カンボジアでは交通ルールがまだ確立していないようで、クラクションは常時鳴っているし、3人、4人乗りのバイクを多く見かけるし、見ていてハラハラする場面もあり、車の事故現場を見た時は「やっぱりな」と、不謹慎にも思っていました。

バタンバンに着き、次の日からPPSのサーカス学校で、様々な国から来たアーティスト達によるワークショップが行なわれ、トランポリン、ジャグリングなど、他にもいろいろな科目の中で、僕はアクロバットを選び、暑さと戦いながら、ボディランゲージを駆使し、いろいろと教わってきました。そして、様々なアーティスト達に触れている内に、自分がこの人達と同じ舞台上で芸をするという事が急に怖くなり、それから何度も自分の作品を見つめ直したり、新しい技を考えたりもしたが、「急に変えても上手いかな」という思いがよぎったりで、中学生依頼の頭痛に悩まされた日もありました。

フェスティバル本番では、あまり納得のいく出来にはならず、ミスもいくつか、、、でもお客さんは喜んでくれたと思います。

今回の、このフェスティバルで得たものは大きく、沢山のアーティストから得たものは大きく、彼らから受けた刺激を向上心に変え、今度はもっと自信を持って、この「ティニ・ティノ」に参加したいと思いました。

今回、このように多くを学ぶ機会を作ってくれた人々に感謝。

多大な迷惑をかけてしまった大野洋子さん、ふくろうじさん、それに福田桃子さん、本当にお世話になりました。

「赤いきつね」を持ってきてくれた関口さん、ごちそうさまでした。美味しくて泣きそうでした。

これからもアーティストとして頑張ります。

●サーカス学校 8 年目後期発表会

早いものです。そして毎期ごとに発表会を行っていますので、なんと、16回目の発表会ということになります。現在の生徒数は、11名ですが、研修生として残っているのは1名ですので、10名が在校生ということになります。

今回も楽しい発表会になると思いますので、ぜひ、皆様お誘い合わせの上、お越してください。

期 日 2009年7月17日(金) 16:00~17:30

18日(土) 14:00~15:30

場 所 沢入国際サーカス学校体育館(旧沢入小学校体育館)

料 金 無料(カンパ大歓迎!!)

●サーカス、パフォーマンス公演スケジュール

★木下大サーカス

○静岡公演 2009年7月18日(土)~2009年9月29日(火)

休演日 毎週木曜日と7月22日(水)、8月12日・19日(水)9月16日(水)。但し、8月13日(木)は開演。

会場; JR 東静岡駅前北口特設会場

電話; 054-252-9000 (7月6日まで)

054-265-0045 (7月6日より)

★キグレサーカス『2009 ニューバージョン・サーカス・イリュージョン』

○仙台公演 2009年7月18日(土)~2009年9月23日(水)

休演日 毎週木曜日

会場; グランディ・21 (宮城県総合運動公園) 特設会場

電話; 022-767-6940

★ポップサーカス

○時之栖公演 2009年6月6日(土)~7月5日(日)

休演日 毎週木曜日

会場; 時之栖特設大テント会場

電話; 0550-87-8828 又は、0550-87-3700

★シルク・ドゥ・ソレイユ「CORTEO コルテオ」

○名古屋公演 2009年5月21日(木)~2009年7月12日(日)

会場; 名古屋・新ビッグトップ コルテオコールセンター 0570-02-0120

★ポリショイサーカス

○東京公演 2009年7月18日(土)~7月26日(日)

会場; 東京体育館

電話; 03-3234-7807